



佐藤 慎さん 岩手医科大学医学部

岩手医科大学医学部3年生の佐藤慎さん(21)には、高1年生の時、進学セミナーなどの陸前高田市で地域医療に携わりたいという夢がある。4日後、高校

震災機に医の道

震災体験を機に、医療の道に進むと決めた被災地の学生がいる。大災害が発生した時は目の前の困った人の力になりたいと、夢の実現に向け邁進中だ。



親友亡くした故郷で人の力になる

体育館で父親と再会し、両親ら家族全員の無事が確認できた。だが、見慣れた陸前高田の中心部は「自分が知らない街」に変わり果てていた。市役所近くの自宅は津波に流された。幼なじみの親友が亡くなったことは人づてに聞いた。小中高と同じ学校に通い、震災の前日までふつうに話をしていた。「死」が受け入れられなかった。一方で、初めて身近な人の死に接し、人が死ぬというのはどういふことを考えるようになった。避難していた高田一中では、日本赤十字の医師たちが保健室を臨時の診療所にして診察に当たっていた。被災した人たちが治療や薬を求めて毎日長い列をつくった。元々、世界の紛争地で活躍する「国境なき医師団」に憧れを持っていたが「医療を必要としている目の前の人の力になりたい」と思うようになった。高校が再開してからは、

仮設住宅から10日も学校に通い勉強に打ち込んだ。2年後、医学部に合格。現在、県や一般財団法人「教育支援グローバル基金・ピヨンドトウモロ」から奨学金を受け、矢巾町のキャンパスで医学の基礎を学んでいる。まもなく震災から5年。2、3カ月に1度帰郷する陸前高田の街は帰るたびに風景が変わり、復興を実感する。ただ、いまだに「被災者」と見られることには違和感を感じる。「自分の力で歩いていかなければ」との思いを強くしている。

千葉 美乃里さん 千葉大看護学部



大船渡市出身の千葉美乃里さん(19)は千葉大で看護学を学んでいる。看護師は小さい頃からのあこがれだったが、震災を経験し、いっそうなりたいたいと思うようになった。赤崎中学校で翌日の卒業式の準備をしていた時、震災が起きた。級友と学校の裏山に逃げた。近くの民家に避難させてもらい、翌日戻った学校は津波で浸水していた。家族は無事だったが、自宅は全壊した。どう行動したらいいかわからず、支援を受けるだけの自分に無力感を感じた。震災から間もない時期、避難所に医師と看護師が巡回に来た。「大丈夫ですか」「困っていることはありますか」「困っていることはありますか」。看護師は病気が具合の悪い人を診るだけでなく、優しく声をかけていた。その場の雰囲気を感じて、不安を抱える被災者に安心を与えている看護師の姿が、輝いて見え

被災地で輝いていた看護師 自分も

。「災害が起きた時、役に立つ人になりたい」と思った。大船渡高校に進学し、国立大で看護学部がある千葉大に照準を定めた。岩手を離れ、首都圏のキャンパスで学び始めて1年近く。学内で震災が話題になることはほほくなく、震災の「風化」を感じる。そんな時だからこそ、自分の被災体験は進んで話すようにしている。今までは、家族を失っていない自分が「被災者」と名乗っていないのか、ためらいがあった。でも、5年かけて震災のことを学んだり被災者の話を聞いたりするうち、人それぞれに、その人だけの「3・11」があるのがわかった。被災体験をいかし、将来は災害医療に携わるつもりだ。「日本全国の災害現場で即戦力になれるように、時が過ぎても、震災のことは忘れないでいたい」

(佐藤 慎)